

音読による総合的な英語能力の測定：実証的研究

著者	池田 真生子, 竹内 理
雑誌名	LET関西支部研究集録
巻	9
ページ	23-30
発行年	2002
その他のタイトル	Reading Aloud: An Indicator of Integrative Ability of EFL
URL	http://hdl.handle.net/10112/962

音読による総合的な英語能力の測定: 実証的研究 *

池田真生子 摂南大学
竹内 理 関西大学

Abstract

The purpose of this empirical study is to identify the degree to which learners' ability of reading aloud an English passage is related to their integrative ability of English as a Foreign Language (EFL). For this purpose, correlations between the subjects' cloze-test scores and those of reading aloud a passage were examined. The subjects were 37 Japanese university students learning EFL. They were first given a cloze test. They were then requested to read aloud and tape-record two English passages, which were different in terms of readability. Their individual readings were scored based on a criteria prepared by the researchers. The result shows that learners' cloze-test scores are strongly correlated to their scores of reading aloud. Also, the findings indicate that, with an easier passage, learners' ability to read aloud fluently with appropriate pauses is correlated more strongly to their integrative ability of EFL than their ability to read aloud with appropriate prosodic features is.

1. はじめに

ここ数年来、音読に関する学習法が一般の啓蒙書などでしばしば取り上げられており（例えば、村松、1999; 長澤、1999; 尾崎、2002）、音読を中心とした学習書も多く出版されている（例えば、岩村、1998; 國弘、2001; 土屋、1998）。また、研究の分野においても、外国語の学習法として音読の有効性が、徐々にではあるが論じられるようになってきている（Stevick, 1989; 鈴木、1998; Takeuchi, 2002）¹。しかしながら、学習者の英語能力を測定する方法として、音読の有効性が論じられることは未だ少ない。論じられる場合でも、筆者らの知る限りでは、スピーキング能力などの測定法として述べられているにとどまる。例えば、京堂（1989）は、FSI インタビューテストと音読テストの相関を検証し、スピーキング能力の測定法として音読の有効性を主張している²。一方、Heaton（1988）は、スピーキング能力の中でも特に発音の測定法として音読について言及しているが、日常において学習者が音読する機会が稀有であり、学習にマイナスの波及効果を及ぼすとして、測定法としての音読の実施に否定的な立場を示している。

しかし、音読のプロセスには、単語、文法、意味、談話構造、音韻、韻律などの理解、ならびに理解したものを音声として再生する能力などが総合的に関与するため、

学習者の総合的な英語能力と関係している可能性は否定できない (Clay & Imlach, 1971; 羽鳥, 1982; 鈴木, 1998; 竹内, 2000)。そこで、総合的な英語能力の測定法として知られているクローズテスト (Oller, 1979) と音読能力の相関を調べることにより、音読能力が総合的な英語能力とどの程度関係するのかを検証することにした。

2. 被験者と手順

被験者は、外国語としての英語 (EFL) を学習する日本人大学生 115 名であった。この 115 名に、45 問のクローズテスト (総合的な英語能力の指標) を受験させ、その得点をもとに、総合的な英語能力にばらつきが生じるよう 37 名を抽出した。一方、音読能力に関するデータ収集には、難易度の異なる 2 種類の音読用テキストを使用した。2 つのテキストの難易度を、Readability の指標である Flesch Reading Ease Scale で測定したところ、56 及び 46 であり、両者の間には差があることが認められた³。音読用テキストが 2 種類用意されたのは、難易度の違いがクローズテストとの相関関係に影響を及ぼすかどうかを検証するためであった。なお、音読のデータとしては、クローズテストの得点をもとに抽出された 37 名分のみが使用された。

データの収集は、表 1 に示した順に LL 教室で行われた。まず、総合的な英語能力の指標としてのクローズテストが実施された。その後、被験者が各自の音読を録音するための操作に習熟するように、練習が行われた。音読を録音する直前には、テキストを 1 回程度ゆっくりと黙読する時間 (3 分) が与えられた。ただし、この間に、辞書を引くことやメモを書き込むことは許可しなかった。

表 1. データ収集の手順

順番	収集されたデータの内容
1)	45 問のクローズテスト
2)	難易度の低いテキストの音読 (難易度は 56)
3)	難易度の高いテキストの音読 (難易度は 45)

音読の採点は、筆者らが設定した基準 (表 2、表 3) をもとに行われた。この基準は、京堂 (1989) などをもとに、簡便性を考慮して作成され、「滑らかさ」と「発音」の 2 側面に大別されている。それぞれ 0 から 5 の 6 段階で採点され、1 から 4 に関しては補足点 (0.5) を設けて合計 10 段階 (点数の範囲は 0~5) の評価とした。「滑らかさ」は、余計な言い直し、不必要なポーズ、そして必要なポーズの有無などを考慮に入れて全体的 (Holistic) に採点された。一方「発音」は、イントネーション及びアクセントの位置、そして単音の発音を考慮して採点された。各被験者の音読結果は、「滑らかさ」、「発音」、及びその総合点の 3 通りに得点化された。

採点は、2 名の教師により、数回の話し合いで基準の統一を図った後に行われた。なお、採点者間信頼度数は .89、採点者内信頼度数は 1.0 であり、ともに一致度は高かった。データの分析では、ピアソン積率相関 (Pearson Product-moment Correlation) を利用して、クローズテストの得点と音読の得点の相関を検証した。

表 2. 音読の採点基準: 「滑らかさ」

滑らかさ*	
5:	言い直しや余計なポーズが全くなく、必要なポーズもある。
4:	言い直しが時々あるが、理解できる。 〔余計なポーズが句や節の途中で時々見られたり、必要なポーズが なかつたりするが、理解できる。〕
3:	言い直しがあるが、理解できる。 〔余計なポーズが句や節の途中に見られたり、必要なポーズがなかつたりするが、 理解できる。〕
2:	言い直しが頻繁で、理解が困難。 〔余計なポーズが句や節の途中で頻繁に見られ、必要なポーズも 少なく、理解が困難。〕
1:	言い直しがが多く、理解が極めて困難。 〔余計なポーズが、単語ごとまたは単語の途中に多く見られ、必要な ポーズもほとんどなく、理解が極めて困難。〕
0:	言い直しがきわめて多く、理解が不可能。 〔余計なポーズが単語の途中にきわめて多く見られ、必要なポーズが なく、理解が不可能。〕

* 1 から 4 には、+ 記号による補足点 (0.5) を設け、どちらかへの判定が難しい場合の中間点とした。

表 3. 音読の採点基準: 「発音」

発音*	
5:	イントネーション・アクセントの位置及び単語の発音が適切である。
4:	イントネーション・アクセントの位置がやや正しくなく平板に聞こえるが、英語らしく聞こえ、発音上の誤りもほとんどなく、理解できる。
3:	イントネーション・アクセントの位置があまり正しくなく、発音上の誤りもあるが、理解できる。
2:	イントネーション・アクセントの位置が正しくなく、発音上の誤りも多く、理解に影響を及ぼす。
1:	イントネーション・アクセントの位置も正しくなく、発音上の誤りが目立ち、理解がきわめて困難。
0:	イントネーション・アクセントの位置も正しくなく、発音上の誤りが非常に目立ち、理解が不可能。

* 1 から 4 には、+ 記号による補足点 (0.5) を設け、どちらかへの判定が難しい場合の中間点とした。

3. 結果

表4は、クローズテストと音読（2種類）それぞれの記述統計の結果である。音読において、テキストの難易度別に得点を比較すると、当然のことながら、どの採点指標においても、難易度の低いテキストの方が難易度の高いテキストよりも得点が高くなっている。また、同じ難易度のテキストにおいて、採点指標の別に音読の得点を比較してみると、採点指標が「滑らかさ」の場合に「発音」の場合よりも、やや高い得点となっている。

表4. クローズテスト及び音読の記述統計

	N	M	SD	Max.	Min.
クローズテスト (45点満点)	37	28.4	10.38	42	11
音読: 難易度の低いテキスト					
総合点 (10点満点)	37	5.0	2.0	9.5	2.0
滑らかさ (5点満点)	37	2.7	1.1	4.5	1.0
発音 (5点満点)	37	2.4	0.9	5.0	1.0
音読: 難易度の高いテキスト					
総合点 (10点満点)	37	3.8	1.9	8.5	0.0
滑らかさ (5点満点)	37	2.0	1.1	4.0	0.0
発音 (5点満点)	37	1.8	0.9	4.5	0.0

次に、クローズテストの得点と音読の得点の相関を、テキストの難易度と音読の採点基準の別に、表5に示した。まず、音読の採点基準が「滑らかさ」と「発音」の総合点の場合、クローズテストとの相関を見ると、テキストの難易度に関係なく、相関係数が.70以上 (.78 と.74) の高い値が得られた⁴。この結果より、音読能力には、学習者の総合的な英語能力がある程度反映されているものといえよう。

表5. クローズテストと音読の相関

採点基準	テキストの難易度	
	低	高
総合点	.78*	.74*
滑らかさ	.80*	.72*
発音	.69*	.71*

* $p < .01$

さらに、採点基準を「滑らかさ」または「発音」のいずれか片方のみとした場合における、クローズテストの得点との相関を見てみると、採点基準を総合点とした場合と同じ傾向が認められた。つまり、テキストの難易度に関係なく、相関係数がほぼ .70 以上の高い相関が得られた。このことより、音読能力の採点において、言い直しとポーズの位置を中心とした「滑らかさ」の指標か、またはイントネーション、アクセントの位置、そして単音の発音を中心とした「発音」の指標のいずれか一方に注目することによっても、学習者の総合的な英語能力をある程度予測できると考えられる。

ただし4つの条件の中でも、音読するテキストの難易度が低い場合に、採点の指標を「滑らかさ」としたときに、特に高い相関が見られた (.80)。その反対に、採点の指標を「発音」としたときには、相関の値が低下した (.69)。つまり、音読するテキストの難易度が低い場合には、「発音」を指標とするよりも、「滑らかさ」を指標とすると、学習者の総合的な英語能力をより確実に把握できる可能性があるものといえよう。

なお、4つの条件のうちで、テキストの難易度が低い場合に「滑らかさ」を指標としたときに、特に高い相関が見られた (.80) のは、音読したテキストの難易度が、本研究におけるクローズテストの得点の高い被験者の英語能力に合致していたために、初出単語の認識や文法解析などにあまり負荷が掛からず、彼らの能力が音読の「滑らかさ」の指標に十分に反映されたためと考えられる。

一方、同じテキストを音読しても「発音」を指標とした場合に、あまり高い相関が見られなかった (.69) のは、総合的な英語能力が上位に位置する被験者の音読得点が、「発音」を指標とした場合に総じて低めになったためと考えられる。このことは、難易度の低いテキストを音読したときの得点を、「滑らかさ」の指標と「発音」の指標で示した散布図 (図1、2) より伺える。この2つの図によると、クローズテストの得点が低い被験者は、図1、2のいずれの場合においても、得点が1.0から3.0の間に集中しており、採点指標が「滑らかさ」であっても「発音」であっても、得点に大きな変化は見られない。ところが、クローズテストの得点が高い被験者は、採点指標が「滑らかさ」(図1)である場合には得点が3.0から4.5に集中しているのに対して、採点指標が「発音」(図2)である場合には得点が2.0から3.5に点在し、採点指標が「滑らかさ」ではなく「発音」になると得点が総じて低めになっている。このように、音読するテキストの難易度が低い場合に、クローズテストの成績上位者の英語能力が「発音」の指標に十分に反映されなかったのは、音読したテキストの難易度が低いためにスムーズに読むことができ、被験者が1つ1つの単語をかえって粗雑に音読したこと起因するものと考えられるが、この点については、今後の研究によりさらに検証する必要がある。

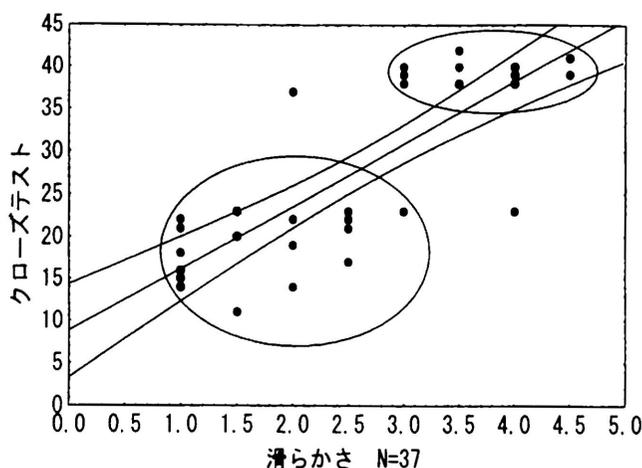


図1. クローズテストと音読の得点: 「滑らかさ」が指標の場合

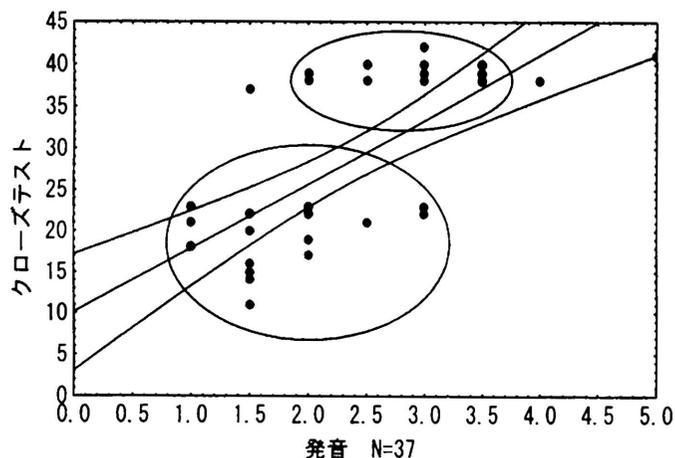


図2. クローズテストと音読の得点: 「発音」が指標の場合

4. おわりに

今回の研究では、最終的に抽出された被験者の数が37名と少なかつたため、今後、より多くの被験者を対象に、本研究の結果を追証する必要があるだろう。また本研究では、総合的な英語能力の指標としてクローズテストのみを使用した。しかし、クローズテストに関しては批判も存在することから (Alderson, 1983; Bensoussan & Ramraz, 1984; Klein-Braley, 1983 など)、他の測定法を総合的な英語能力の指標として用い、音読能力との相関を検証してゆく必要性も考えられる。

このような限界を考慮に入れた上で、本研究の結果をまとめると、

学習者の英語の音読能力は、総合的な英語能力と強く関係している

と結論付けられる。したがって、音読を利用して学習者の総合的な英語能力を測定することも可能といえよう。また、

音読するテキストの難易度の違いにより、音読能力と総合的な英語能力との間に、より強い相関が見られる場合がある

こともわかった。このことは、教室内などにおいて、音読により学習者の総合的な英語能力を測定する場合には、彼らの英語能力が音読に十分に反映されるように、音読させるテキストの選定に注意する必要があることを示しているといえよう。

今後は、音読能力をより容易に測定できるように、今回使用した採点表に、実際の音読サンプルを付すなどして、より簡便で信頼性の高い採点表を確立してゆく予定である。

註

* 本研究は、外国語教育メディア学会（LET）第42回全国研究大会（於：大妻女子大学）での発表に加筆修正を加えたものである。

1. 羽鳥 (1977)、Nuttall (1996)、Saito, Horwitz, & Garza (1999)、高梨・高橋 (1987) などは、学習法としての音読に否定的な立場をとる。ただし、Nuttall (1996) は、sense group ごとに文意を把握するための初期段階における学習法としては、音読の有効性を認めている。
2. FSI インタビューテストとは、米国 Washington D.C. にある Foreign Service Institute（国務省外国語学校）で開発された OPI (Oral Proficiency Interview) テストのことである。
3. Readability については、竹内 (2000) などを参照のこと。
4. 清川 (1990) によると、 ± 0.40 - ± 0.70 は高い相関があることを示し、 ± 0.70 - ± 1.00 はかなり高い相関があることを示すという。

参考文献

- Alderson, J.C. (1983). The cloze procedure and proficiency in English as a foreign language. In J.W. Oller Jr. (Ed.), *Issues in language testing research*. Rowley, MA: Newbury House.
- Bensoussan, M. & Ramraz, R. (1984). Testing EFL reading-comprehension using a multiple choice rational cloze. *The Modern Language Journal*, 68, 230-239.
- Clay, M.M., & Imlach, R.H. (1971). Juncture, pitch and stress as reading behavior variables. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 10, 133-139.
- 羽鳥博愛 (1977). 『英語教育の心理学』東京: 大修館.
- 羽鳥博愛 (1982). 『心理言語学と英語教育』東京: 大修館.
- Heaton, J.B. (1988). *Writing English language tests*. New York: Longman.

- 岩村圭南 (1998). 『音読で英文法をモノにする本』 東京: アルク.
- 清川英男 (1990). 『英語教育研究入門』 東京: 大修館.
- Klein-Braley, C. (1983). A cloze is a cloze is a question. In J.W. Oller, Jr. (Ed.), *Issues in language testing research*. Rowley, MA: Newbury House.
- 國弘正雄 (編) (2001). 『CDブック英会話・絶対・音読』 東京: 講談社パワー・イングリッシュ.
- 京堂政美 (1989). 「Reading Aloud と言語能力の相関について」 *STEP BULLETIN*, 1, 117-129.
- 村松増美 (1999). 『私も英語が話せなくなった』 東京: 日本経済新聞社.
- 長澤信子 (1999). 『外国語上達法』 東京: 海竜社.
- Nuttall, C.E. (1996). *Teaching reading skills in a foreign language, 2nd edition*. Oxford: Heinemann.
- Oller, J.W. (1979). *Language tests at school*. London: Longman.
- 尾崎哲夫 (2002). 『英語「独習」開眼法』 東京: 講談社.
- Saito, Y., Horwitz, E.K., & Garza, T.J. (1999). Foreign language reading anxiety. *Modern Language Journal*, 83 (2), 202-218.
- Stevick, E.R. (1989). *Success with foreign languages: Seven who achieved it and what worked for them*. New York: Prentice Hall.
- 鈴木寿一 (1998). 「音読指導再評価: 音読指導の効果に関する実証的研究」 『LLA 関西支部研究収録』 7, 13-28.
- 高梨庸雄・高橋正夫 (1987). 『英語リーディング指導の基礎』 東京: 研究社.
- 竹内 理 (編著) (2000). 『認知的アプローチによる外国語教育』 東京: 松柏社.
- Takeuchi, O. (2002). What can we learn from good foreign language learners?: Qualitative studies in the Japanese FL context. *Proceedings of the 29th JACET Summer Seminar*, 20-26.
- 土屋澄男 (1998). 『あなたも英語をマスターできる: 成功のための五つの公理と只管音読のすすめ』 東京: 茅ヶ崎出版.